

【研究論文】

複合的な歓待

—ゲストハウスの経験したパンデミックと戦争—

風戸 真理 短期大学部准教授

研究論文

複合的な歓待

——ゲストハウスの経験したパンデミックと戦争——

風戸 真理

Mari KAZATO

目次

1. はじめに
2. モンゴルの観光業とゲストハウス
 - 2-1. モンゴルの観光業
 - 2-2. モンゴルのゲストハウス
 - 2-3. 調査地・調査方法
3. Xゲストハウスの変遷
 - 3-1. コロナ前の外国人観光客と地方ツアー
 - 3-2. コロナ期の貸家業
 - 3-3. ロシアの戦争から逃れる人びと
4. 考察
5. おわりに

[Abstract]

Complex Hospitality: How a Guesthouse Experienced the COVID-19 Pandemic and War

This paper describes how a guesthouse in Mongolia practiced complex hospitality when confronted with social changes such as the pandemic and war in 2020s.

X Guesthouse offers accommodation and tours to foreign tourists. However, the number of guests decreased sharply in 2020 due to the imposition of COVID-19 pandemic prevention regulations. Therefore, X Guesthouse changed its business model and rented out rooms to Mongolians. In 2022, Russia invaded Ukraine and mobilized its citizens; as a result, many Russians fled to Mongolia and stayed at this guesthouse.

Accordingly, X Guest House accepted three types of guests, categorizing them as *juulchin* (foreign tourists), *ail* (neighbors), and *oros* (Russian citizens). In principle, guesthouses offer hospitality within the commercial domain. However, in this case, complex hospitality could be observed through the private realm of the owner's family and mutual penetration with the local community.

1. はじめに

本論は、歓待の複合的なあり方を示すために、モンゴル国（以下、モンゴル）のホスピタリティー産業の一部をなす簡易宿所に焦点を当て、簡易宿所としてのゲストハウスが発揮してきた歓待（ホスピタリティー）のあり方を、パンデミックや戦争といった社会変化の中で、オーナー家族の視点から記述するものである。

ゲストハウスを取り巻く状況は、COVID-19（以下、コロナ）によるパンデミ

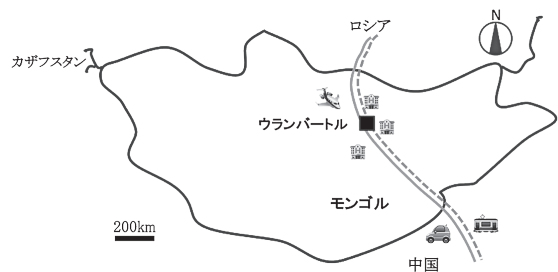


図1 モンゴル国の地図

ックの前からロシアのウクライナ侵攻（以下、戦争）開始以降にかけて、変化してきた。まず、モンゴルは、北はロシア連邦共和国（以下、ロシア）および南は中華人民共和国（以

キーワード：歓待，ゲストハウス，モンゴル国，パンデミック，戦争

Key words: hospitality; guesthouse; Mongolia; pandemic; the Russia-Ukraine war

下、中国)と国境を接し、両国との経済・政治的な関係が強く、人の行き来が多い(図1)。ただし、コロナ前にゲストハウスに宿泊した観光客は、欧米やアジア各国をはじめとした全世界から集まっていた。

ところが2020年、コロナ感染が急激に広まり、モンゴルでは政府の厳しい防疫規制により観光客が文字通りいなくなった。そこでゲストハウスのオーナー家族は外国人を対象とした宿泊業を、国内のモンゴル人を対象とする部屋の賃貸業に転業して、収入を確保した。

2022年、コロナ感染が減り、ゲストハウスに客が戻ってくると、ロシアからの予約が増えた。ロシアの戦争が始まり、徴兵を拒否する者らがモンゴルに逃れてきたのである。彼らは経済的な余裕がない中、先が見えない国外逃亡生活の第一歩をゲストハウスで始めた。

このような変化する社会状況においてゲストハウスで展開されるホストとゲストとの相互行為を分析するために、本論では歓待論を用いる。以下に、歓待論と観光に関するこれまでの議論をレビューする。

歓待の理念的定義については、ジャック・デリダによるとまず、家の戸口を通過して私の中に場を占めることである [デリダ 2018: 144]。次に、そういった来訪者と家主との関係は、名前や社会的地位のある者に対する「通常の意味での歓待ないしは条件付きの歓待」と、匿名の他者に対する「絶対的ないしは無条件の歓待」に分けられる [デリダ 2018: 66-67]。コンラード・ラシュリーは、ホスピタリティ産業を含む大きな歓待の文脈は、歓待活動の「社会的領域」(共同体における寛大さや庇護と同時に義務や慣習を提示する)、「私的領域」(核家族における饗応で、家内の領域と社会的領域が相互作用する)、「商業的領域」(価値システムの中にあって中心ではない無料サービスなど)の三つに分類することができ、それぞれの領域は他の領域と交わることを示している [Lashley

2000]。

観光業と地域社会との関係については、山崎真之が、観光の島・小笠原諸島において観光客等が島を気に入り、住居や仕事を見つけて移住する社会的な過程に注目して、そこに観光におけるホストとゲストの役割のゆらぎを指摘し、歓待の社会的領域と商業的領域の重なり合いを示している [山崎 2020]。

ロシアの戦争開始後のモンゴルでも、ロシアからモンゴルに来た人びとが、最初に宿泊場所や住居を確保し、その後に生活基盤を築いていく移住のプロセスを実践している。高倉浩樹らは、とくにブリヤート人の事例を取り上げて、彼らの一部は帰国し、一部はモンゴルで就労先や就学先を見つけて、長期滞在ビザを取得したこと [Takakura, Horiuchi and Byambajav 2024: 180, 182]、モンゴル側の移民支援の動機にはパンモンゴリズムの思想、国境を越えるモンゴルとブリヤートの同胞心、困難を抱えた人への広範な個人的共感があると指摘している [Takakura, Horiuchi and Byambajav 2024: 187]。

モンゴルにおける歓待についてデビッド・スニースは、*zochlomtgoi zan* (歓待) というモンゴル語の用語を用い、これが現代モンゴルの社会的なヒエラルキーの中で世帯主に課せられた義務であり、相手を問わない歓待は世帯主の地位と公共規範を満たす能力を示すものであると述べている。寛大な歓待は結果として、「優位な年長者／劣位の年少者」というモンゴル文化特有のドメスティックな権力関係を生じさせるという [Sneath 2019]。草原のゲル(遊牧民の天幕)における客人の歓待は、寺尾萌によれば *zochlol* (接客)や *dailal*(もてなし)と呼ばれる。ただし、草原のゲルには親族から通行人まで多様な人びとが入ってくるので、家人は訪問者を取りあえずゲルに迎え入れた上で、訪問者の行動に応じて様々な程度と内容の応対をおこなっている [寺尾 2020]。

ゲストハウスは宿泊業の中でも、インバウンドを主な客層とし、他者との交流を重視した空間設計をしたものである [渡邊・前田 2022:18]。同じものが欧米ではホテルと呼ばれ、アジアではゲストハウスと呼ばれることが多い [渡邊・前田 2022:38]。

本論では、モンゴルのゲストハウスで、同じホストが同じ場所で、異なる社会状況において異なるゲストに対して、異なる領域の歓待を複合的にこなってきたことを示していく。

2. モンゴルの観光業とゲストハウス

2-1. モンゴルの観光業

モンゴルの観光産業を概観しよう。モンゴルでは1992年に社会主義から市場経済化・民主化して体制転換した後、訪問する外国人が増加してきた。

モンゴル統計局のデータベースを参照すると (2024年5月1日現在, 1999～2023年のデータが閲覧可能), モンゴルに入学した外国人の数は1999年には16万人だったのが, 2023年には史上最多の64.4万人となり, 24年間でインバウンドは4倍に増加した (図2) [NSM 2024]。とはいえこの間には, 世界規模で流行した感染症の影響による訪問外国人の減少が複数回あった。すなわち, 2002年からのSARS, 2012年からのMERS, 2020年からのコロナの3回にわたる入学者の減少である (図

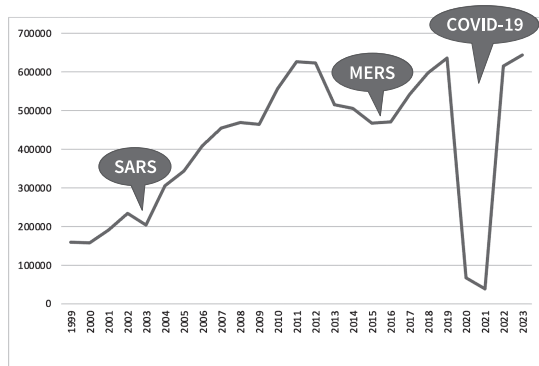


図2 モンゴルに入学した外国人 (人)

2)。とくにコロナによる影響は甚大で, 2020年にはコロナの影響でインバウンドが6.7万人にまで減少した [NSM 2024]。

国別では, 中国, ロシア, 韓国から入学した外国人の数が一貫して多く, 2023年には全体の77.8%を占めている [NSM 2024]。モンゴルへの入学経路には陸路と空路があり, 中国やロシアからは鉄道や自動車で行くことができ, その他の国からは飛行機で行く (図1)。外国人観光客がモンゴルを訪問する季節は毎年, 気候の良い7～8月に集中している [Mongolian Statistical Information Service 2024]。

観光業は, 環境・観光省の管轄下であり, 「観光法」(2000年5月)により定められている (観光法は調査後の2024年に改正された)。行政による観光業の振興としては, 首都ウランバートル市が2014～2016年に Hospitable Ulaanbaatar というプログラムを一時的に実施した。近年ではモンゴル政府が2023年と2024年を「ビジット・モンゴリア年」と定めて [MONTSAME 2022], 2024年に100万人の観光客誘致を目指している。

Hospitality という概念がモンゴル社会でどのように用いられているかについては, スニースは *zochlomtgoi zan*, 寺尾は *zochlol* を挙げていた。英語 - モンゴル語辞書には hospitality の訳語として, “*zochlon hundleh yavdal*” “*zochlomtgoi zan*” “*nairsag zan*” の三つが収録されている [Bolor dictionary 2023]。これらをそれぞれ直訳すれば「客を歓迎して敬意する状態」「客好きの性格」「協調的な性格」という意味となる。なお, 最初の2つのモンゴル語表現は *zoch-* で始まっていて, *zochin* はモンゴル語で「来客」「訪問者」である。

ただし, ザブハン県やアルハンガイ県の牧畜地域で筆者がおこなった日常生活の観察では, “*dailah*” (馳走する, 歓待する), “*tsai ulgah*” (お茶を飲ませる) といった飲食物

の供与を示す表現が、歓待することの意味で用いられていた。さらに重要なのが、本論の対象となるゲストハウスに宿泊するのは外国人観光客であるが、モンゴル語では旅行者とくに外国人観光客のことを、*zohcin*ではなく、*juulchin*と呼ぶ。つまり観光客は、歓待を意味するモンゴル語表現の語根となっている *zochin* とは異なるカテゴリーの人びとである。

2-2. モンゴルのゲストハウス

宿泊業の中でのゲストハウスの特徴について説明する。

日本では宿泊業は、旅館やホテル、簡易宿所（ゲストハウスを含む）などのように、宿泊料を受けて人を宿泊させる営業と定義されており、アパートなどのように利用者が生活の本拠地を置く貸家業とは区別されている [厚生労働省 2024]。モンゴルでは宿泊施設の種類は、モンゴル国家規格「MNS5409:2004」で13種類に [Standart hemjil zuin gazar 2004]、国際規格「MNS ISO18513:2021」で25種類に分類されている [Standart hemjil zuin gazar 2021]。国家規格が宿泊施設を分類する基準は、立地、宿泊者の種類、食事提供の有無、施設の形状などである。

モンゴルのホテルの数はモンゴル国統計局によれば、2023年に490軒であり、その内訳は、「モーテル」という分類の宿泊施設が425 (86.7%) と最多で、「三つ星以上のホテル」が48、「2つ星ホテル」が17となっている。同年の宿泊業の収入は5344億 MNT(モンゴル・トゥグルク。2024年5月の為替レートで約246億円) に上るが、その72.6%を三つ星以上のホテルの収入総額が占めており、モーテルやゲストハウスなどからの収入は25.7%と限定的である [Oyunjargal and Munkhtuya 2024]。

ゲストハウスは国家規格ではデン・ボーダル (*den buudal*, 簡易宿所) として定義され、その中にはB&Bも含まれている。ただし、Xゲストハウスのオーナーたちは、自身の施

設のことをモンゴル人に対しても英語で「ゲストハウス」と言っていて、デン・ボーダルという表現は使われていなかったので、本論ではゲストハウスと呼ぶ。

ゲストハウスの業務とサービスの基準は国家規格「MNS5738:2019」で定められており、消費者の利益を保護するために、建物、周辺環境、災害対策、玄関とレセプション、客室などについて詳細な基準がある [Standart hemjil zuin gazar 2019]。ゲストハウスの施設数については、世界最大のオンライン・トラベル・エージェント「Booking.com」(ブックイング・ドット・コム) 上で2023年9月に検索したところウランバートルのゲストハウス(ホステルを含む)数は34軒であった。

ウランバートルの宿泊施設の料金は、『地球の歩き方2017~18』によれば、ホテルではシングルで1泊40~268米ドルであるが、ゲストハウスではドミトリーで6ドル、シングルで15ドルからと安価である [地球の歩き方編集室 2017:50-57]。ゲストハウスの宿泊者は個人旅行のバックパッカーがメインである。バックパックに荷物を背負い、自分の足で歩いたり、現地の人びとと同じ公共交通で移動したりする旅行スタイルの人が多く、アジア周遊や世界一周の途上にいる人も多かった。モンゴルでゲストハウスは、このような個人旅行者に対して、安価な宿泊施設と地方への観光ツアーを提供するエージェントとして機能していた。

2-3. 調査地・調査方法

調査地はモンゴル国ウランバートル市に位置するXゲストハウス(仮名)であり、現地調査の期間は2018年8月、2020年2月、2023年3月と9月である。調査方法は人類学的な参与観察および聞き取り調査、そしてゲストハウスが保管している記録の閲覧である。聞き取り調査はモンゴル語、英語、ロシア語でおこなった。



写真1 Xゲストハウスの屋上からの景観

Xゲストハウスは1994年創業の、モンゴルで最初のゲストハウスであり、自社が所有する2階建てのコンクリート・ビルで営業をおこなっている。Xゲストハウスの正式名称は「Xゲストハウス&ツアーズ」であって、客をゲストハウスに宿泊させる宿泊業と、客の希望に応じてレンタカーとガイドを手配して地方ツアーを実施する旅行業を営んでいる。

Xゲストハウスの立地は、ウランバートル市中心部の便利な場所であるが、その地域は「ゲル地区」(ger horoolol)と呼ばれている(写真1)。ゲルは、モンゴルの遊牧民が草原で住居として使用する白い丸い天幕であるが、都市においても住居として多く使われている。Xゲストハウスの施設は、コンクリートの2階建てビルで、その屋上にはゲルが建てられており、ゲル地区の景観になじんでいる。

Xゲストハウスには客室が合計19室ある(2023年9月現在)。その内訳は、コンクリート・ビルの2階に9室(写真2)、1階に5室があ



写真2 Xゲストハウスの2階のツインルーム

り、加えて、屋上に建て増しされた木造の客室が4室、ゲルが1軒である。オーナーらも同じ建物に住んでいる。2階にはオーナー家族が事務所および居住スペースとして利用する部屋が複数あり、1階には従業員の住居や、リネンルーム、ボイラールームがある。

Xゲストハウスのオーナーは家族で、その親戚がスタッフとして働いている。経営者は、2023年現在60代の男性と30代の息子である。これに加えて、60代男性の妻(60代女性)とその親族である老若男女約10人が必要に応じて、運転手、ツアーガイド、施設の増築と維持、朝食準備、掃除、洗濯、レセプションなどを手伝っている。親族以外では、住み込みで働く高齢夫婦1組がおり、夫はボイラー係、妻は宿直を担当している。Xゲストハウスに居住しているのは、オーナー親子と住み込みで働く高齢夫婦の合計5人である。

Xゲストハウスが利用している予約システムは複数あるが、2023年9月現在、ほとんどの予約はBooking.comを通して届いているという。Booking.comの利用料は宿泊料の15%で、月末に利用料を銀行振込する。オーナーたちは日常的にBooking.comのシステムを開いて予約者、宿泊者の情報を確認していた。Booking.comがオーナーに通知する予約者情報は、宿泊者名、予約地点(国旗のマークが付く)、予約番号、部屋タイプ、チェックイン日、チェックアウト日、滞在期間、人数、選択された言語、予約日、この予約者についての重要な情報(禁煙や空港送迎の希望など)である。また、過去のデータもシステム上に蓄積されているので、筆者はこれらをXゲストハウスの資料として参照した。

3. Xゲストハウスの変遷

3-1. コロナ前の外国人観光客と地方ツアー

コロナが流行する前の2019年まで、Xゲストハウスを主に利用していたのは欧米・アジ

アからの外国人観光客であり、その多くが日帰りから数泊までの個人ツアーをゲストハウスで申し込んで草原に出かけたという。Xゲストハウスの手書き台帳には多様な国籍が書き込まれていた。

宿泊者の共通言語は一般に英語で、ゲストハウスの看板や掲示物は英語で書かれていた。オーナーは新しい宿泊者を迎える時に英語で挨拶をし、「Where are you from?」と出身地を尋ね、予約内容を確認し、宿泊代金をMNTまたは米ドルで前払いで受け取った。宿泊者にパスポートの提示は求めていなかった。Xゲストハウスのオーナーはロシア語も話すので、宿泊者の必要に合わせてロシア語に切り替えることがあった。宿泊者どうしの会話では、英語で挨拶し、同郷人であることがわかると母語に切り替える様子が見られた。

Xゲストハウスには、ドミトリーと個室、そして共用のダイニングがあった。人気があったのは、ゲルのドミトリーとゲルの個室である。ゲルのドミトリーには、円形のゲルの壁沿いに4つのベッドが円陣型に並べられており、中央には薪ストーブがあった。ドミトリー宿泊者のシャワーとトイレは共用で、簡易なシャワー室とトイレが2つずつゲルの近くに建てられていた。ゲルの客室は、Booking.comに「tent」と表示されていて、ウランバートルのゲストハウスの中でも注目を集めていた。

朝になるとレセプション前の共用ダイニングに宿泊者が集まり、自家製のパンやできたてのパンケーキ、フレッシュなサラダを食べながら、他の宿泊者と挨拶をして交流をすることが多かった。オーナー夫婦は前夜に朝食の仕込みをし、朝食会場では料理をサーブしながら宿泊者がよく食べる料理、あまり食べない料理をチェックして、朝食メニューを改良していた。

Xゲストハウスの宿泊客はバックパッカーが多かったが、乳幼児連れの家族、大型犬と

一緒に旅をしている人、登山家などもいて多様性が高く、宿泊者どうしの話も尽きなかった。ある時は、白い長毛の大型犬を連れてヨーロッパから来た中年女性がゲルのドミトリーに宿泊し、自分のベッドの横に犬を寝かしていた。他の宿泊者も寛大だった。ゲルのドミトリーを数人で借り切り、1カ月間も住んだネパール人たちもいた。

このような多様な宿泊者の様子は、オーナーによってよく把握されていた。というのも、Xゲストハウスは小規模で、オーナー家族が自ら接客をしていたからである。Booking.comにはオーナーの接客に満足する口コミが多く、オーナーとの関係によってリピーターになる者も多かった。

Xゲストハウスの正式名称がXゲストハウス&ツアーズであるように、ゲストハウスの経営において重要なのは地方ツアーという商品である。Booking.comの施設説明には「周辺エリアでは乗馬やハイキングが人気です。レンタカーも利用できます」と書かれている。宿泊予約者が、予約時に希望として地方での活動を書き込めば、オーナーはツアーを計画し、Booking.comのメッセージ機能を利用して提案した。宿泊者がゲストハウスに到着した後でオーナーと対面で旅行相談してツアーが成立することもある。

モンゴルを訪れる外国人観光客は、自然の美しい国立公園に出かけてキャンプや釣りに興じたり、草原の遊牧民家族のもとでホームステイして乗馬やラクダ・ライディングを楽しんだりすることを期待している。このような個別的な観光体験を支えるのが、ゲストハウスが提供する地方ツアーなのである。Xゲストハウスは、1人から数名の観光客の希望に応じて、ジープ（ドライバー付きで1日80ドル、ガソリン代別、2019年現在）やガイドを手配し、日帰りから数泊での地方への少人数ツアー・サービスを提供した。

ゲストハウスの宿泊料金は安価であるた

め、オーナー家族が言うには、宿泊代金は光熱費の足しになるくらいで「利益はない」。X ゲストハウスの収入は、モンゴルの他のゲストハウスと同様に、宿泊代金ではなく、主に宿泊者が申し込む草原ツアーから得られていた。また、ツアー代金は Booking.com の手数料の対象とならない。このようにコロナ前のゲストハウスは、宿泊をきっかけとしてアクセスしてきた旅行者に、地方ツアーを申し込んでもらうことで利益を出すという、宿泊業と受注型企画旅行を組合わせたビジネスをおこなってきた。

コロナ前に X ゲストハウスに滞在していた人びとはまとめて「ジョールチン」(juulchin, 外国人観光客)と呼ばれていた。観光目的でモンゴルを訪れた外国人はすべてジョールチンである。ただし、X ゲストハウスのオーナーらはジョールチンを、会計や送迎の際には名前や、本人が名乗るニックネームで呼び、スタッフどうしで宿泊者たちを区別する時には「あの日本人 (ter yapon)」「あのフランス人 (ter frants)」と出身国名で指示していた。とくに親しくなった宿泊者や親しいリピーターについては「これはナイツ (ene naiz, 友人)」と筆者に紹介した。オーナー夫婦はナイツになった元宿泊者を訪ねてヨーロッパ周遊旅行をしたことがあり、泊めてもらったナイツの自宅(豪邸)の写真を見せてくれた。

3-2. コロナ期の貸家業

2019年末に中国でコロナ感染が始まると、2020年初頭には各国に感染が広がった。モンゴル政府は、2019年時点で327万人であった人口を守るため、2020年2月に高度警戒準備態勢を取り、国境を封鎖し、ウランバートル市でロックダウンをおこなった。その後も警戒度を上げて厳しい防疫規制を続け、モンゴルへの観光客の訪問がなくなり、観光業は飲食業とともに大打撃を受けていた。

2021年春、筆者は X ゲストハウスのオーナー女性に国際電話した。すると彼女は電話口で「ジョールチン・バイフグイ」(juulchin baihgui) と言って黙った。彼女が言ったことを直訳すると「旅行者がいない」である。実際、X ゲストハウスの宿泊者も0人である状態が続いていた。Booking.com の記録によれば、2020年2月から2021年11月までの22カ月間、予約者数、宿泊者数ともにゼロであった。

そこで X ゲストハウスのオーナーは、外国人観光客を対象としたゲストハウス業を、国内のモンゴル人を対象とする賃貸業に転業した。実は、X ゲストハウスはコロナ前から、ゲストハウスの経営の傍らで、1階の数部屋のみをモンゴル人に貸すことがあった。これに対して、コロナ期には旅館業を休止して、施設の全体を貸家業に転じたのである。当時、モンゴルでは経営に行き詰まったホテルが部屋を賃貸する事例が他にも見られた [JICA 2021: 61]。

モンゴル人のどのような事情の人びとが X ゲストハウスの部屋を借りたのだろうか。地方からウランバートルに移転してきた家族が住宅を購入するまでの間に住んだり、郊外に住んでいた家族が小中学生の子どもをウランバートルの学校に通わせるための拠点としたり、地方出身の大学生がウランバートルの大学に通学するために借りたりしていた。

X ゲストハウスのオーナーは、モンゴル人に部屋を貸す場合には、外国人旅行者に貸すよりも安く提供した。また、X ゲストハウスのオーナーたちは、賃借人であるモンゴル人たちを「モンゴル」(mongol) もしくは「アイル」(ail, 隣人) と呼んで、ジョールチンと区別していた。以下に、X ゲストハウスにおけるアイルという語の用例を紹介する。

【事例1】アイルの子どもが描いた絵

2023年9月、X ゲストハウスの1階にインコ2羽を描いたアクリル絵画のキャン

バスが置かれていた。完成度は低いながらも素敵な絵なので筆者が由来を問うと、スタッフの1人が、「1階に住んでいたアイルの子どもが描いた。鳥を飼っていた。彼らは引っ越して行くときにこの絵を置いていった」と言った。

コロナ期に、1階の部屋を借りていた家族はインコを飼っていた。そのインコを子どもが描いて、転出の際に絵を置いていったというわけである。X ゲストハウスの廊下や宿泊室の壁には多くの絵画(写真2)や彫刻が飾られていて、このインコの絵もその一部となって廊下を飾っていた。X ゲストハウスには過去に暮らしたアイルの痕跡が残されているのである。

3-3. ロシアの戦争から逃れる人びと

2022年2月、モンゴルではコロナ対策としての高度警戒準備態勢が解除され、そして間もなくロシアがウクライナに侵攻した。

X ゲストハウスには宿泊客が戻ってきた。というのも、モンゴルやヨーロッパで政府のコロナ対策が緩和されるにともない、モンゴルを訪問する外国人の数そのものが少しずつ回復し始めたからである。同時に、X ゲストハウスにはロシアからの訪問者の割合が増えた。Booking.com の2022年9月8日 から2023年9月7日までの1年間の記録を見ると、ロシアからの予約が全体の50%以上を占めている。

ロシアからの予約というのは、宿泊者が予約をおこなった地点がロシア国内であったことを示している。というのも、2-3. で述べたようにBooking.com では宿泊予約者の国籍を示していないので、オーナーらは予約地点(国旗のマークが付く)と宿泊者名から国籍や性別を想像する。

X ゲストハウスにロシアからの予約が増えた背景には、ロシアの戦争があった。2022年9月21日にはロシアで部分的動員令が発表さ

れた。これは、職業軍人の他に、軍務経験のある予備役と呼ばれる男性を招集して戦地に送るものである。ロシアでは男性に徴兵の義務が課せられていて、1年間兵役等につく。この経験がある男性市民が緊急で招集されることになったのである。ロシアの徴兵年齢は2022年には18～27歳であったが、2023年8月には18～30歳までに引き上げられている。

このようなロシア国内の状況下で、徴兵対象となる男性とその家族、また戦争をすることが支配的である母国の状況とは別の生き方を求める人びとが、ロシアから出国することを決意した。ロシアでは戦争が始まってから出国希望者が多く、空路も陸路も混雑していたが、モンゴルはその行き先の一つであった。モンゴルとロシアは相互に30日間までの短期滞在にビザを免除しており、ロシア人にとって行きやすい国である。とくにシベリアの人びとにとっては、モンゴルは陸路で、安価に行ける国として注目された。ロシアからモンゴルへの越境者はロシア人だけでなくアジア系の少数民族、とくに言語的にも文化的にもモンゴルの人びとと近いブリヤート人が多かった。

オーナーらはゲストハウスの料金表などの掲示物を、これまで英語のみであったものを、ロシア語併記に改めた。筆者は、ロシアからモンゴルに来てX ゲストハウスに宿泊する人びとに、滞在の様子について聞き取りをおこなった。ブリヤート人女性とサハ(ヤクート)人男性の事例を示す。

【事例2】Gさん、ブリヤート人(女性、約60歳)

Gさんのエスニシティはブリヤートで、自宅はモンゴル=ロシア国境から近いところにある。Gさんは2022年秋にX ゲストハウスに来て、2023年3月に筆者と出会った。Gさんはロシア語とブリヤート語を話すことができ、モンゴル

で話されているハルハ方言のモンゴル語もおおむね理解できる。

彼女は高校生の息子と二人でロシアからモンゴルに来て、Xゲストハウスに半年間滞在した。その間に息子はモンゴルの大学を受験して合格した。彼女は毎日3回、オーナー家族のキッチンに来て、オーナーの鍋やフライパンを借り、オーナーの電気コンロと流しを使って調理をした。オーナーたちは、ポーズというご馳走料理を作った時には、Gさん家族のためにポーズを皿に盛り付け、Gさんがキッチンに来た機会にこれを渡しておすそ分けしていた。

GさんはXゲストハウスに半年間滞在し、息子が大学の学生寮に移った後、自身もウランバートル市内にアパートを借りて移った。

【事例3】Aさん、サハ人（男性、37歳）

Aさんのエスニシティはサハまたはヤクートと呼ばれる、シベリアのもう一つのアジア系少数民族である。自宅はヤクーツク郊外の農村にある。

Aさんは2023年9月初旬にXゲストハウスに2泊し、筆者と出会った。ロシア語とサハ語、そして英語を話す。彼はモンゴル語にサハ語との共通語彙をみつけたと喜んでいて、モンゴル語会話はわからないのでオーナーたちとは英語で話していた。

彼が言うには「私は旅をしている時、生きていと感じる」。彼はオルタナティブな人生を求めてモンゴルに来たと言う。別の言葉で言えば、戦争に反対しているということである。これを明言するためには、この時のロシアの状況では国を去るしかなかった。

Aさんもオーナー家族のキッチンに来て「ティー・セットを使わせてもらえま

せんか」と尋ね、ティーカップやティースプーンといった耐久消費財に加えて、ティーバッグや牛乳といった食材も所望していた。

Aさんはモンゴルに来る前に、ベトナムやタイなど東南アジア諸国を旅行していて、モンゴルの後には韓国へ旅立った。ロシア国籍者がビザ無し渡航できる国が限られていて、日本のパスポートがうらやましいと3回言っていた。

これまで働いてきた貯蓄で世界旅行しているが、ロシアに対する経済制裁のために銀行カードやクレジットカードが使用できない困難がある。ロシアを出国して世界を旅している者どうしで助け合っていて、現金を実家との間で送っている。

彼は2024年5月現在も韓国を旅していて、ロシアからはアクセスが制限されている西側のSNSに動画を投稿している。

このようにロシアから予約した宿泊者は、徴兵のリスクから逃れるため、戦争の体制から逃れるため、自由に生きるため、ロシアを脱出して地理的に近いモンゴルに入国していた。ある者はモンゴルにとどまり、ある者はさらに第三国へと旅立った。出国には急を要したので、ビザを取得せずに入国できる国が選ばれたが、そこにも無期限にいられる訳ではなく、ビザ無しで滞在できる期間内に別の国に移る必要があった。

ロシアから脱出した人びとの国外滞在の動機は、ロシアの戦争が続く限り解消しないので、Gさんの他にもXゲストハウスで長逗留する者は多かった。彼らは資金的な余裕がないためにゲストハウスを滞在先に選んでいて、観光のために遠出することは多くなく、ゲストハウスの施設で長い時間を過ごした。オーナーたちのキッチン、調理器具、電気・水道を借りて自炊する者もいた。

このようにロシアの戦争後にロシアからモ

ンゴルに来て X ゲストハウスに宿泊する人びとをオーナーたちは、エスニシティーにかかわらず、まとめて「オロス」(*oros*, ロシア人)と呼んでいた。ただし、予約者を迎え入れる時にオーナーたちは出身地を尋ねているので、エスニシティーについても把握していた。スタッフどうして宿泊者たちを区別する時には「あのブリヤート人(*ter buryad*)」「あのヤクート人(*ter yakut*)」とエスニシティーや出身共和国名(ロシア連邦を構成する共和国)で指示していた。

コロナ前にもロシアから来る宿泊者はあったが、当時のロシア人観光客はジョールチンというカテゴリーの下位分類としてのオロスと認識されていた。ところが、2022年以降に X ゲストハウスの宿泊者の多くを占めることになったオロスを、オーナーは「ジョールチンではない」と強調する。ジョールチンではない新しいカテゴリーとしてのオロスは「ツアーに行かない」「貧しい」という。3-1. で述べたように、ゲストハウスの収入は主にツアーから得られる。コロナ不況に苦しんできた X ゲストハウスにとって、オロスが多く来てくれることで収入の足しにはなっているが、コロナ前に欧米やアジアからのジョールチンが多くツアーを注文してくれた時のようには業績は回復していない。

4. 考察

以上より、X ゲストハウスは原則として外国人観光客を対象とする宿泊業と旅行業を営

む施設であるが、コロナ流行期にはモンゴル人に部屋を安価で賃貸したり、ロシアで戦争が始まると徴兵拒否して国外脱出したロシア人を迎えたりと、3種類の利用者を迎えて多様なビジネスを展開してきた。

表1に X ゲストハウスをとりまく社会的状況の変化と利用者の変化をまとめた。利用者は宿泊者と賃借者の両方を指すものとする。コロナ前の2019年までは世界中から多くのジョールチンつまり外国人観光客が来て滞在していて、利用者の共通言語は英語であった。ジョールチンは余暇を使って消費としての旅行を自ら積極的に計画してモンゴルに来た人びとで、宿泊に加えてツアーを利用することが多く、利益が大きかった。オーナーと宿泊者との会話の中で宿泊者の出身地がわかると、ジョールチンの下位分類として出身国名が用いられた。また、オーナー家族と宿泊者との相互交渉のなかで友情が芽生えるとナイトツ(友人)という関係概念が用いられていた。

コロナ期に施設を利用したのはアイルと呼ばれるモンゴル人だけとなった。彼らはオーナーから隣人とみなされていて、その家族生活が X ゲストハウスに埋め込まれていた。調査時点においても、その痕跡としての絵がオーナーらによって保存されていて、彼らが暮らしたことの記憶がオーナー家族らに共有されていた。

ロシアの戦争開始後にはオロスが増え、言語もロシア語中心になった。オロスは宿泊のみをおこない、利益は小さかった。彼らは自国の政治状況の変化によってやむなくモンゴ

表1 X ゲストハウスの利用者の変化

	コロナ前	コロナ期	ロシアの戦争開始後
	～ 2019年	2020 ～ 2021年	2022年～
どこから	世界中から	モンゴル国内	ロシアから
呼び名	ジョールチン(外国人観光客)	モンゴル、アイル(隣人)	オロス(ロシア人)
言語	英語など	モンゴル語	ロシア語など
利用されるサービス	宿泊とツアー	貸家	宿泊
利益	大	小	小

ルに来ており、銀行カードやクレジットカードも使えず貧困状態にあり、この状況がいつまで続くか自身ではコントロールできないという問題を抱えていた。このためオーナーたちは私用のキッチンに光熱費を徴収せずに貸したり、食事をおすそわけしたりと、親切にしていた。とはいえ、これらの行為は優位な位置からの施しとは異なるものと思われる。というのも、モンゴルには、1924～1992年の70年間の社会主義の歴史がある。オロスはモンゴルにとって、ポスト社会主義という共通の歴史をもつ地域の内部での隣人、いわば「歴史的な隣人」であると考えられるかもしれない。

次に、Xゲストハウスの実践を、歓待論に照らして考察する。

第一に、歓待とは、家の戸口を通過して私の中に場を占めさせることであるが [デリダ 2018:144]、Xゲストハウスの建物は自宅を兼ねていて、その玄関は24時間開放されていた。観光業はホスピタリティー産業で、ゲストハウスはビジネスなので、そこでおこなわれるのは、商業的歓待であり [Lashley 2000]、条件付きの歓待であるといえるだろう [デリダ 2018:66-67]。

ただし、Booking.comからオーナーらに事前に届けられる予約者情報は多くはない。名前の登録はあるが、ハンドルネームを登録することも可能で、ほぼアノニマスである。国籍や性別を知ることができない。レセプションの際にも、オーナーたちは利用者のパスポートやIDなど身分証明書の提示を求めていなかった。このようにXゲストハウスでは他者がかなりの程度他者（匿名の他者）であるままに受け入れられていた [デリダ 2018:66]。

第二に、Xゲストハウスでは歓待の商業的領域が私的領域と交わる場面があった。オーナーたちは日常的に、利用者から求められたものをできる限り、親切に与えていた。求め

られなくても、家族の空間での食事やお茶の習慣にジョールチンやオロスを招いたり、自分たちのために作った食事を取り置いて後で渡したりもしていた。オーナーにとって宿泊サービスの提供はビジネスであるが、私的空間であるキッチンに宿泊者が侵入することを許容することはホテルの無料サービスといった歓待の「商業的領域」 [Lashley 2000] とは異なり、長期滞在者に食事を分配することはオーナーの地位と公共規範を満たす能力を示すものと考えられるだろう [Sneath 2019]。また、宿泊者とオーナーたちの交渉の中で相互の関係は変化し [Cf. 寺尾 2020]、ジョールチンの解像度が上がって出身国が前景化したり、個人どうしの人格が立ち上がって友人どうしになったりしていた。

第三に、Xゲストハウスの実践には、観光業と地域社会が混ざり合う、商業的領域と社会的領域の交わりもみられた。すなわち、Xゲストハウスのツアー事業では、外国人を遊牧地域に連れて行って、ホームステイなどの文化体験を提供していた。また、Xゲストハウスには外国人が宿泊するだけでなく、モンゴル人も居住しており、外国人とモンゴル人が時間を違えて、時に一部重なり合いながら、場所を共有していた。なお、他のゲストハウスでは、盗難防止のためにスタッフ以外のモンゴル人の出入りを禁止しているところがある。これに対してXゲストハウスは、モンゴルにあって、モンゴル人にも外部の者にも開かれた「場」であり、そこでは誰もがアノニマスで、いくばくかの宿泊・賃借代金さえ支払えば社会的ステータスが問われることなくいられる「共有地」となっているといえるのかもしれない [平川 2022:119-120]。

オロスへの歓待は、母国での生活が危機にさらされているという意味で難民への歓待であり、帰国の目処がつかないという意味で移住者を地域に受け入れる歓待であると考えら

れる [Cf. 山崎 2020]。高倉浩樹らによれば、ロシアから逃げてくるブリアート人の支援に当たる諸個人は、モンゴル文化的な倫理の中にある、必要を抱える人びとをサポートする道徳的義務に従っており、そこには必要を抱えた人への広範な個人的共感や国境を越えるモンゴル・ブリアート同胞心がみられるという [Takakura, Horiuchi and Byambajav 2024: 186-187]。これに対して X ゲストハウスのオーナーたちは、ブリアート人といった特定のエスニックなカテゴリーや、個人的なつながりに限定することなく、あらゆる人びとに門戸を開き、自宅を兼ねているゲストハウスの建物に招き入れていた。そして、宿泊者と生活の場を共有し、必要なものは援助し、会って会話を重ねる中で個別の関係を構築していた。

このように X ゲストハウスは、コロナによる防疫政策や経済不況を乗り越えて、ジョールチン、アイル、オロスという3つのカテゴリーの利用者を対象として、商業的領域・私的領域・社会的領域を横断する形で複合的な歓待をおこなってきた。

5. おわりに

本論では、モンゴルのホスピタリティー産業の一部をなすゲストハウスが、パンデミックや戦争という社会変化の中で、複合的な歓待を実践してきた様子を示してきた。

X ゲストハウスは外国人観光客に宿泊とツアーを提供してきたが、2020年にはコロナに対する防疫規制のため宿泊者が激減した。そこで、X ゲストハウスは転業して部屋をモンゴル人に貸した。2022年には、隣国ロシアで戦争が始まり、ロシア人が逃げて来て滞在した。

このように X ゲストハウスは3種類の利用者を受け入れ、それぞれをジョールチン (外国人観光客)、アイル (隣人)、オロス (ロシ

ア人) とカテゴライズしていた。ゲストハウスの事業においては原則として商業的領域での歓待がおこなわれるが、本事例ではオーナー家族の私的領域との混ざり合いや地域社会との相互浸透が見られた。

【謝辞】

本研究は北星学園大学個人研究費および JSPS 科研費 JP22K01104 の助成を受けたものです。X ゲストハウスのオーナー家族および旅行者の皆さんには調査にご協力いただいた。寺尾萌さんからは原稿に有益なご意見をたまわった。ここに記して感謝いたします。

【文献】

- Bolor dictionary (2024) hospitality (<https://bolor-toli.com/>).
- Booking. com (2023) (<https://www.booking.com>).
- 地球の歩き方編集室 (2017) 『地球の歩き方 D14 モンゴル』ダイヤモンド社.
- デリダ, ジャック (2018) 『歓待について』廣瀬浩司訳, 筑摩書房.
- 平川克美 (2022) 『共有地をつくる わたしたちの「実践私有批判」』ミシマ社.
- JICA 独立行政法人 国際協力機構 (2021) 『モンゴル国 可能な観光開発に係る情報収集・確認調査報告書』.
- 厚生労働省 (2024) 旅館業法の概要 (<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000130600.html>).
- Lashley, Conrad (2000) In search of hospitality: Towards a theoretical framework, *International journal of hospitality management* 19 (1) : 3-15.
- MONTSAME (2022) Revised Draft of Law on Tourism Submitted, *MONTSAME*, 2022-11-20 (<https://montsame.mn/en/read/308857>) .
- NSM (National Statistics Office of Mongolia) (2024) Mongolian Statistical Information Service (<https://www.1212.mn/mn>) .
- Oyunjargal, M. and Munkhtuya, M. (2024) The total revenue of food and beverage service increased by 29.2 percent period previous year, “NEWS RELEASE”, 09 February 2024,

- National Statistics Office.
- Sneath, David (2019) Everyday hospitality in Mongolia; Obligation, enactment and projects of governance, *L'Homme*, 231-232:67-88.
- Standart hemjil zuin gazar (2004) MNS5409:2004. *Leisure. Tourism. Travel, tourism and accommodation type. General terminology of travel, tourism and accommodation type.*
- Standart hemjil zuin gazar (2019) MNS5738:2019. *Den buudal. Ornhii shaardlaga.*
- Standart hemjil zuin gazar (2021) MNS ISO18513:2021. *Tourism services – Hotels and other types of tourism accommodation – Terminology.*
- Takakura, Hiroki, Horiuchi, Kaori, Byambajav Dalaibuyan, (2024) Unrequited compassion across the border: Mongolians' support for the Russian-Buryat Exodus after Mobilization, Erich Kasten, Igor Krupnik, Gail Fondahl (eds.) *A Fractured North – Facing Dilemmas*, pp. 175-190, Fürstenberg/Havel: Kulturstiftung Sibirien.
- 寺尾萌 (2020) 「歓待と親密性：モンゴルの草原におけるゲルと訪問者の迎え入れについての考察」(特集 歓待の人類学)『文化人類学』85 (1): 92-109.
- 渡邊崇志・前田有佳利 (2022) 『ゲストハウスがまちを変える—エリアの価値を高めるローカルビジネス』学芸出版社.
- 山崎真之 (2020) 「商業的歓待と社会的歓待の絡み合い——小笠原移住者と観光をめぐって」『文化人類学』85 (1): 56-72.